

事業所名： グループホーム さくら ユニット①

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0391100096		
法人名	株式会社 ブルーム		
事業所名	グループホーム さくら ユニット①		
所在地	〒026-0055 岩手県釜石市甲子町5-2-4		
自己評価作成日	令和5年11月1日	評価結果市町村受理日	令和6年2月1日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>①コロナ禍も緩和されてきたので、地域との関わり、多方面での協力体制の構築を復活していきたい。 ②医療関係との連携を図り、主治医への報告、連絡、相談を欠かさず、入所者様の体調管理に努めている。 ③防災訓練(火災、災害)消防署立ち合いでの評価が良い</p>

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は、道の駅仙人峠から車で約3分ほどの国道側の集落に位置し、2つのユニットのグループホームを運営している。法人は市内に有料老人ホームやデイサービスなど、計5つの事業所を展開しており、これらの事業所がお互いに支え合いながら、当事業所の運営をサポートしている。経営者と管理者は、柔軟に対応し、在宅時と変わらない生活や入居者の声に耳を傾けるなど、温かみのある雰囲気での運営を心掛けている。コロナ禍前には、入居者や職員と一緒に回転寿司や居酒屋に外出したり、地域の日帰り温泉旅行や盆踊りなどに参加して楽しんでいた。防災や看取りなど生命に関わる重要な事柄にも真剣に取り組んでおり、法人が主催する防災委員会を月に1回の頻度で開催し、総合的な避難訓練だけでなく、AEDのトレーニングなどの部分的な訓練も実施している。入居者の看取りにも対応し、看取りの段階に入る際には、看取りを前提とした介護の態勢に切り替え、訪問診療医師と協力し、家族の思いに寄り添いながら対応している。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和5年11月28日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

事業所名 : グループホーム さくら ユニット①

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	コロナ禍により、地域との関わりが途絶えてしまった。レク活動に必要な物品を購入し、レク活動に力を入れ、実践した。	地域密着型サービスとしての意義や役割を込めた理念は、平成24年に開業した際に、経営者が職員と話し合って作成した。日常の業務活動で目につきやすい場所に掲示し、申し送りなどで気付いた事柄について話し合い、振り返っている。職員は在宅での生活の継続を念頭に、具体的な実践につなげている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍により、地域との関わりが減っていたが、町内会の草取りには、職員も参加した。	コロナ禍前は、利用者や職員が地区の旅行や盆踊りに参加し、事業所主催の季節ごとの夕涼み会やミズキ団子づくりに地域の人々も加わって幅広い交流が行われていた。現在はコロナ禍の影響で地域との交流が減少しているが、コロナ禍の収束の状況に応じ、再び以前のような「地域との交流を重ねたい」としている。	事業所では、コロナ禍の収束に応じて以前のような地域との幅広い交流を再開したいとしており、その場合には、地域の方々との関りを通じた生活支援を期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	実践できていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍により、運営推進会議の開催が出来ていなかったが、10月に今年度第一回目を開催し、現状の報告を行い、理解して頂けたと思う。	市の職員や町内会長、民生委員、家族代表などで構成されている。本年度はコロナ禍の状況を踏まえ、9月と11月に対面で開催されている。会議では、利用者の状況や活動報告、事故・ヒヤリハット事例、入居者の状況を報告し、意見交換が行われている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議に包括支援センターの方にも参加して頂き、連絡調整ができる体制を取っている。また、権利擁護を利用する入所者様の対応も進めている。	市の介護保険説明会に職員が参加し、保険証の更新・区分変更時には、市の窓口で相談し、助言を得ている。また、利用者の連帯保証督促請求や入居相談にまつわる困難事例の解決に向け、連携して対応している。行政担当課と事業所との協力関係は良好である。	

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム さくら ユニット①

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	委員会を設置し、社内研修を実施している。玄関の施錠は行わず、センサーを設置している。	身体拘束に関する指針とマニュアルを作成し、身体拘束・虐待防止委員会に毎月3名の職員が出席している。処遇困難ケースに対しては、利用者の生活歴等を理解し、主治医の助言を得て支援している。家族には身体拘束のリスクと身体拘束を行わない支援について説明している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることのないよう注意を払い、防止に努めている	委員会を設置し、社内研修等でも取り入れている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	職員が権利擁護について学ぶ機会は持てなかったが、介護支援専門員と相談し、入所者様の必要に応じて、支援している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約はご自宅に伺ったり、事務所で説明しながら行っている。ご家族が遠方から来られない時は郵送し、電話等での説明、質問を受けている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族から意見や要望を受けた時は、職員間で話し合い、会議や研修会でも報告しあっている。	利用者には自由に話せるような雰囲気づくりをしており、職員から声掛けを頻回に行うようにしている。意思疎通が困難な方にはハイ、イエエで応える質問にしたり、家族からは面会の機会に要望等を伺うようにしている。ほとんどの要望を具体化できるよう対応している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎日の申し送りや、職員から意見や要望があった場合、社内の運営会議や合同会議の際、報告したり相談したりしている。	個人面談は年1回実施し、今年度は職員全員にパワハラに関するアンケート調査も実施した。職員からの提案で防犯カメラの設置、洗濯機の更新を行っている。コロナ禍にあっても職員が安心して就業できるよう、職員と家族の感染予防に借家3室を確保し、利用者の居室には陰圧室とするための高額な機材を配備している。	

事業所名 : グループホーム さくら ユニット①

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表が毎月、個々のタイムカードを確認している。必要時は職員との面談を行う。また、毎月、勤務表作成時は、職員個々から、休み希望を受け、できるだけ希望に叶った勤務表を作成している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	毎月社内研修会を実施している。資格取得の研修に参加出来る体制を取っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍により、参加出来なかった。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所時の本人からの要望等に添い対応した。また、精神状態に配慮し、距離を保ちながらの関わりをした。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所を拒否するのではないかと家族の不安があり、入所者様も家族も安心できるよう支援に努めた。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入所前にご自宅に伺って、困りごとや今までの経過等聞いたり、退院時には病院での面会等にて状況把握に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	無理強いせず、本人が出来ること(食器拭き、洗濯干し、たたみ)を行って頂く。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	必要に応じて、家族と連絡を取り合い、状況報告をしたり、電話を取り次ぎ、家族との会話が出来るよう支援している。また、荷物が届いた際も、電話をして、会話が出来るよう支援している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族以外の方が急に来所され、面会を希望した際は、出来るだけ応じるよう支援している。	入居に先立って家庭訪問を実施し、職歴、生活歴、家族関係、友人、対人関係などの情報を収集している。馴染みの床屋、美容院、呉服屋などを継続して利用し、新聞の購読など在宅時と変わらない生活の提供を心がけている。入居者は友人との面会や手紙、床屋や美容院の利用など、馴染みの人々と交流をしている。利用者が馴染みの店での買い物を希望する時には、職員も同行しその関係の継続に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入所者様の性格やコミュニケーション能力を把握し、対応している。必要に応じ、席替えを行ったり、職員が間に入り対応したり、孤立しないよう心がけている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了後も、介護支援専門員に相談があり、フォローしている。		

Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント

23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	各入所者様の表情を把握し、変化を観察して、言葉や言動だけでなく、内面も理解できるよう検討している。	ほとんどの利用者は意思表示ができ、入浴時や廊下での立ち話、夕食後のホールなどでの利用者間の話に耳を傾けている。話の内容は、申し送りノートに記載し職員間で情報を共有しケプランに反映している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	情報の中から生活の状況を把握し、出来るだけ以前通りの生活に近い環境が送れるよう支援している。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム さくら ユニット①

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	心身の状態の変化を把握し、状況に合わせて支援見守りを行っている。職員間での申し送り時、本人のペースやその時の状態に合わせて対応できるようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護計画書をご本人やご家族に渡し、内容の確認を行いモニタリングの際にもご家族等に状況を説明して意見等の反映に努めている。	初回入居時のモニタリングは1ヵ月で行い、おおむね状況の変化がなければ6ヵ月毎に見直している。居室担当者から情報を収集し、困難な課題があった場合は、職員間でカンファレンスを実施している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々様子は個別に記載している。気づいた点や工夫した点については、申し送りで報告し、状況報告している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その時に応じて可能な限り柔軟に対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍により、実践出来なかった。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ご本人と家族の同意を得て、定期的な訪問診療を受けている。必要時に専門医への受診を行っている。	一部の利用者は入居前のかかりつけ医を引き続き利用しているが、ほとんどの利用者は、訪問診療を行う協力医に変更している。変更の際には、以前のかかりつけ医から紹介状を得ている。通院時には職員とケアマネが同行し、変化があれば家族に報告している。	

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム さくら ユニット①

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職はいない。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院した際には入院までの経過を病院の相談員に文書等で伝え、入院後もやり取りをしている。また、退院の際にも入院中の情報を受け取り、必要であればご本人との面会をさせて頂いている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ご家族、主治医との話し合いの場を持ち、本人、ご家族の希望に合わせて対応している。	今年度5人の看取りを行った。ご家族の意向を確認し、自由に面会ができるように配慮している。職員は居室を頻回に巡回し、医師や看護師からの指示に従い、家族の思いにも寄り添っている。訪問診療の医師は24時間、いつでも対応してくれ心強い。死後の処置も心をこめて全身の清拭を行い、利用者も居室から最後のお見送りをしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	内部研修会を行っている。 様態が変化した場合は、主治医や管理者に連絡が取れる体制になっている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回以上、消防署の立会いのもと、訓練を行っている。町内会と災害時の地域協定を締結し、災害での避難場所として、地域の方々の受け入れを行っている。	法人が主催する防災委員会は月1回開催し、年2回の昼夜避難訓練の他に職員招集、AED訓練、図上訓練なども行っている。事業所は洪水・土砂災害危険区域に指定され、対応した訓練も実施している。法人内での事業所協力により、水害・土砂災害時は法人内デイサービスの車を借用し、利用可能な道路を經由して避難することとしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	プライバシー保護に関する研修を毎年実施している。日々の業務の中でも、お互いに注意し合うよう努めている。	職員は入居者への配慮に心掛け、丁寧な声かけを行っている。利用者個々の生活歴等を理解し、言葉の選択に気を配り、いつでも職員同士が注意し合う環境を築いている。プライバシー研修では「本音を吐いてみよう」をテーマとするグループワークを通じ、ストレスの解消や感情のコントロールの学びを深めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日頃の会話で本人の希望を汲み取っている。外出、買い物などを行っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	食べたいお菓子や飲み物などを購入している。夜間にテレビを好きな時間まで見ている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	自分で洋服を選んで着ている。化粧品も自由に行っている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食後の片づけを一緒に行っている。誕生日には、本人から聞き取り、食べたい物を出るだけ提供している。	職員はメニューを見ながら交代で担当し、その日の食材で調理している。一部の入居者は食器拭きなどの作業も手伝っている。コロナ禍が続いているが、近くの道の駅に出かけてラーメンやソフトクリームを楽しんでいる。利用者は、以前のように回転寿司店や居酒屋に出かけられる日を楽しみにしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	10時と15時に水分補給、おやつ時間を設けている。好きなときに水分を取れる状況を作っている。また、尿量の少ない入所者様には、こまめな水分補給を進めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に口腔ケアを実施している。一人で出来ない方には、介助し、職員が口腔内を確認している。毎食時、口腔体操を行っている。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム さくら ユニット①

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄をチェックし、表に記録している。個々に応じてトイレ誘導を行っている。	職員は排泄チェック表で排泄パターンを念頭に置きながら、本人のサインに気を配り、個別の排泄介助に専念している。体調不良時には、リハビリパンツやポータブルトイレを再び利用し、オムツの回避に努めている。便秘のサイン、便の性状や行動を把握し状況の悪化を防いでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食事には野菜を多めに提供している。日課として、体操を行っている。便秘がちな方には、医師に相談し、内服薬で調整している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴日は決まっているが、状況に応じて随時入浴できるようにしている。	入浴は原則日曜日を除き週に2回とし、時間や回数なども入居者の希望を取り入れている。シャワー浴、お湯加減などや姉妹での入浴希望がある場合も対応している。入浴を嫌がる方へも無理強いをせず、嫌がる理由やその背景などのアセスメントに努め、促し方などについての検討を重ねている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼夜逆転しない様心がけ、個々の生活パターンに合わせた対応をしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の変更についての申し送りを行い、未投薬、誤薬の防止のための二重チェックを行っている。内服後の残薬確認を行い、飲み終わった後の袋は一ヶ月単位で保管し、後から確認できるようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	個々の能力に応じて食事の片づけや洗濯たたみ等の家事を行って頂き、役割を持つ喜びを持てるよう支援している。趣味の将棋は職員が相手をしている。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム さくら ユニット①

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。 又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍により、家族と外出する機会は持てなかったが、コロナ禍が緩和となり、職員と一緒に出かける日を設けた。	昨年はコロナ禍で外出が少なくなっていたが、収束状況を見ながら接触を避けて、花見、紅葉狩のほか港を眺めながら釜石大観音を訪問している。道の駅ではラーメンやおにぎり、ソフトクリームを楽しみ、町内会長宅ではイルミネーションを見学している。これから先、以前のように外食や居酒屋に出かけることができるとしている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大きさを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	外出時、必要時にはいつでも使えるよう対応している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援している	家族から電話があった時は本人に取り次ぎ、会話をしている。また、本人から希望があったときは、自由に電話ができる体制にしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	室温を調整し、心地よく生活できる環境を提供している。季節に合わせた飾り物を掲示し、季節感を味わって頂いている。	建物内は温度調整が行われ、日当たりの良い共用空間には、利用者向けのテーブル、椅子、ソファ、テレビが置かれている。利用者が快適に過ごせるよう、不快な刺激を避けて配慮され、壁面には季節感のある装飾が施されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用スペースと娯楽スペースを設け、自由にくつろげる環境にしている。一人になりたい時は、居室で自由に休まれている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ベッド、筆筒、エアコンはグループホームで設備、その他は、ご自分のものを持参し、思い思いに配置している。	入居者の居室ではエアコンによる空調管理が行われ、ベッドや筆筒、クローゼット、洗面台が備え付けられている。入居者が持ち込んだ仏具やテレビ、ソファ、テーブルのほか、装飾されたカレンダーや家族の写真が掲示されている。	

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム さくら ユニット①

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	どの居室からも比較的トイレが近い。トイレが分からない入所者様には、分かりやすく表示したものを設置し、対応している。事務所や台所がオープンになっており、入所者様の様子が見えるようになっている。		